

International Bulletin Fraternitas Ordo Fratrum Minorum

381

Edition

Volume LIX | 5 June 2026



INDEX

2027年総会に向かって	1
総本部の予定	2
兄弟マッシモの視点、2026年5月	3
フランシスコと歴史： 新しさと伝統の間で	4
ポーランド、 聖フランシスコの帰天の記念	6
管区会議、 アシジの聖フランシスコ・セラピム管区	8
ポーランド、天使たちの聖マリア管区、 中間管区会議	9
2026年、 正義と平和・被造物の保全(JPIC)コース	10
コイノニア	11
尊者Maria Ana Alberdi Echezarreta, OIC	12
マルセイユにおける移民のための、 フランシスカン宣教と移民の宣教者たち	13
Life in the Order	14
教皇レオ十四世、 回勅『マニフィカ・フマニタス』を発表	15
Journey to God	15

2027年総会に向かって

次の総会は、2027年5月にベトナムの「ヌイ・クイの聖母巡礼センター（Pilgrimage Centre of Our Lady of Núi Cúi）」で開催される予定です。ここは同国最大のカトリック巡礼センターとされており、敷地内の補助的エリアを除いても、広場だけで10万人以上を収容することができる。



聖霊降臨の日に、次の総会に使用されるロゴとテーマが発表された。

小さき兄弟たちのミッション：神の日に向かって、今キリストに従い、福音を宣べ伝える 「私は世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」（マタイ 28・20）



サブタイトル： 現代において、預言的

WWW.OFM.ORG

フランシスカン活動を目指して、テクノロジー、多元主義、人間的脆弱さのなかで、キリストの福音に従う。

小さき兄弟会の公式ウェブサイトには、2027年総会に関する新しい情報スペースが開設された。ホームページは、この識別と傾聴の時期に作成される新しい資料や情報で、随時更新される予定である。



総本部
公式サイトに
新しく設けられた
2027年総会の
特集ページ

www.capitologenerale2027.ofm.org



5月18日と19日、総会の事務長である兄弟Sergiusz Bałdygaは、これまでの作業を総理事会に説明し、今後講じるべき次のステップについて話し合いました。その後、兄弟Sergiuszと総会の副事務長の兄弟Juan Isido Aldana Maldonadoにより、総本部に集まった新任の管区長および分管区長にすべての内容が共有された。



総本部の予定



☑ 総理事の兄弟Cesare Vaianiは、6月1日、スペインのアランツァスのフランシスカン管区の管区会議の開会式に参加した。6月2～6日、総長の兄弟Massimo Fusarelliに同伴して、同じスペインの無原罪の御宿り管区を訪問する予定。

☑ その後、総長の兄弟Massimoと総理事の兄弟

Konrad Cholewaおよび総理事の兄弟Siphelele Gwanisheniは、アフリカにある地方組織を歴訪する予定。7～10日は中央アフリカ共和国の諸天使の聖マリア宣教地区を、10～15日はカメルーンの兄弟たちの宣教拠点を、15～21日はコンゴ共和国のアフリカの聖母宣教地区を訪問する。

Government of the Order



兄弟マッシモの視点、2026年5月

「その兄弟があなたの憐れみを得ることなしに…」



WWW.OFM.ORG

フランシスコのある手紙が、私に問いを投げかけ続けています。過ちを犯した兄弟のことで悩んでいた奉仕の任にある兄弟に宛てられたその手紙には、私をいつも驚かせる一節が書かれています。「ある兄弟が罪を犯したとします。それが犯しうる最大の罪であったとしても、あなたの眼を見た後で、憐れみを乞うたならその兄弟があなたの憐れみを得ることなしに帰っていくことがこの世において決してありえないようにすることです」

この数年間に行なったいくつかの訪問が頭に浮かびます。大きな対立ではないのですが、共同体の日常に小さな亀裂が潜んでいました。グループや民族、文化、世代による分断です。あまり口には出されないこれらの違いですが、ともに生き、協力し、真に理解し合ううえで重くのしかかっています。

私は、ある共同体が、単純ながらも勇気ある一歩を踏み出したのを見ました。それは、自分たちの間にある亀裂を認め、それを言葉にし、ともに語り合うことでした。時には、誰かの助けを借りました。これは決して小さなことではありません。確執にただ耐えるのではなく、乗り越えていくための第一歩なのです。そうすると、何かが動き出します。共同体は、息を吹き返します。

もっと厳しい状況もあります。兄弟たちが過ちを、時には重大な過ちを犯し、交わりを大きく損なってしまったケースです。私は、奉仕者たちや兄弟たちが過ちを犯した兄弟たちに同伴する姿を見てきました。それは、過ちを隠すためでも、軽視しているためでもありません。こうした兄弟たちを過ちのなかに置き去りにしないためです。分断を越えて歩む可能性を切り開くためなのです。

こうした状況のなかには、デリケートさと断固たる姿勢が求められる場合もあります。ある兄弟が、虐待をしてしまった場合、市民的および教会的正義によって求められることはすべて行なわなければなりません。それは、とりわけ被害者に対する真理と尊重の最初のかたちです。私たちの配慮において、もっとも優先されるべきなのは被害者たちです。そのことは保証されなければなりませんし、決してこれを他のことで代替してはなりません。そうして初めて、いくつかのケースにおいて、兄弟性による新たな受け入れへの歩みが開

かれるのを見ました。何人かの兄弟たちが、真理



と同伴と可能な限りの償いからなる、双方にとって長い道のりについて、私に語ってくれました。私は、その歩みの困難さも理解しました。神はそのいつくしみによって、これらの兄弟たちにも回心の道を準備してくださるという信頼に支えられて、初めてこのことが可能となります。

フランシスコの手紙は、これらのすべてを、厳しい光であり続けます。私たちに無邪気さや安易な寛容を求めているではありません。私たちが扉を閉ざさないことを求めているのです。たとえ、いやまさに正義がその役割を果たしたとき、果たし続けているときでも、奉仕者たちの目、兄弟たちの目は注がれており、それによって、もう一人の兄弟が新たな歩みを始める可能性をなおも見いだせるようにしなければならないのです。

このフランシスコ年に、私は自問しています。私たちの共同体は、具体的にどのように赦しを生きているのでしょうか。私たちは、人間関係における苦労を言葉にできるのでしょうか。それとも、壁となる沈黙のなかにそれらを埋もれさせ続けてはいないのでしょうか。憐れみと不作為を混同することなく、過ちを犯した人に同伴しているのでしょうか。そして、同じ配慮をもって、傷つけられた人たちを保護しているのでしょうか。

福音的赦しは、一度きりの行為ではなく、苦労の多い脆い日常的「文法」なのです。これによって、私たちは同じ屋根の下で暮らす単なる同僚ではなく、兄弟となります。フランシスコは、このことを知っていました。私たちもまた、それをいまあらためて学んでいく必要があります。



Centenari Francescani

フランシスコと歴史： 新しさと伝統の間で

2026年5月25～26日、ローマ、教皇庁立アントニアヌム



WWW.OFM.ORG



ローマにおいて、2026年5月25～26日にかけて、アシジの聖フランシスコの帰天800周年（1226-2026年）を記念して、国際研究学会「フランシスコと歴史：新しさと伝統の間で」が、教皇庁立アントニアヌム大学付属中世・フランシスカン研究高等研究所、イタリア中世歴史研究所、教皇庁歴史学委員会が協力して開催された。

この二日間に行なわれた考察は、新しさと伝統を結びつける「間」に開かれ続ける歴史的で教会的まなざしで、フランシスコに近づいていくよう招いた。その「間」は、互いに競合する選択肢ではなく、識別を助ける実り豊かな緊張関係である。福音の徹底から生まれたフランシスカンの経験は、その原初的インスピレーションを窒息させることなく「調整」し、受け継いだ様式を裏切ることなく変化させ続けられることを示している。したがって、諸史料や背景、制度的仲介を真摯に研究することは、いまなお、教会とフランシスカン家族に対する具体的奉仕であり続けている。

本学会のプログラムは、さまざまな視点から、中世の福音主義の歩みとその表現をたどるものである。キリストに従うという修道的形式から、「イエス・キリストのみ跡をたどる」というフランシスカ

ンの理解への移行、さらには創立物語における法制と聖人伝の関係までを扱った。こうした枠組みと調和しながら、12世紀から13世紀にかけての福音主義的運動の試練、当時の異端的潮流との緊張関係や共鳴、そしてフランシスコのあかしが当時の教会制度や文化的変化のなかでどのように位置づけられていたかについても論じられた。

こうした文脈において、学会で行なわれた発表のいくつかは、フランシスカンの記憶における連続性と不連続性を理解するうえで、とくに啓発的視点を提供してくれた。Letizia Pellegriniは、厳修派の聖人伝、とくにイタリアのものが、13世紀の伝説を単に繰り返すだけにとどまらず、司牧的で改革的目的で創立期の記憶を戦略的に再解釈し、「使徒」というモデルと説教の中心性に重点を移していることを提示した。そうした意味で、フランシスコとシエナのベルナルディーノの関係は、カリスマ的「新しさ」から教會的で司牧的形式化への移行と捉えることができる。それは、創立者を否定することなく、



アイデンティティと使命の原理として機能させるものである。Nicolangelo D' Acuntoは、これとは違う観点から、アシジという文脈に注意しながら、フランシスコの書き物に表われる教会の位階に対する尊敬が、使徒座（教皇や枢機卿たち）、司教たち（とくにアシジの司教）、そして司祭たちとの交流においてどのように具体化したかを検証し、フランシスコと小さき兄弟会とのつながりの変化とともに、こうした関係が時系列的にどのように変わっていったかについても考察した。

さらに、Pierantonio Piattiは、この視点を拡大し、修道制の始まりから15世紀の厳修派にいたるまでの聖なる創立者の死に関する中世の叙述が、「連続性のなかの不連続性」を理解するための優れた観察の場となることを示し、「聖なる死」の記憶がどのように成熟し、時を経て修道家族の意識の中で変化していくかを明らかにした。

総長の兄弟Massimo Fusarelli (OFM) は、副総長の兄弟Ignacio Ceja (OFM) が読み上げたあいさつのなかで、諸史料の忍耐強く厳格な研究を支える

三つの主催機関に対する感謝を表明し、「間」という解釈のキーワードを、新しさと伝統の対立ではなく、生きた関係を大切に守っていく極として提示した。フランシスコの生涯において、福音的新しさは受け継がれたものを消し去る断絶ではなかったし、伝統は疲れた人の避難所ではなく、研究、識別、現実への傾聴を必要とする創造的忠実さの歩みであった。

セッションは、5月25日に教皇庁立アントニアヌム大学 (Viale Manzoni 1) の講堂で行なわれ、5月26日午前イタリア中世歴史研究所 (Piazza dell' Orologio 4) で閉会した。

すべての発表の要約を読む:

<https://www.antonianum.eu/news/francesco-e-la-storia-tra-novitas-e-traditio-convegno-internazionale-per-lviii-centenario-della-morte-di-san-francesco-dassisi/>

すべて写真を見る [Flickr](#)



ポーランド、聖フランシスコの帰天の記念 2026年5月22～24日、聖アンナ山



WWW.OFM.ORG



2026年5月22～24日にかけて、ポーランドの聖アンナ山において、聖フランシスコの帰天を記念する全国規模の式典が開催されました。フランシスカン家族によって、創設者の「天国への誕生」800周年として体験されたこの記念祭は、祈りと出会い、そしてフランシスカン・カリスマの今日の意義について省察する機会となりました。

このイベントには、在世フランシスコ会（OFS）の兄弟姉妹を含む、ポーランド全土からのフランシスカン家族が参加しました。また、ローマからはフランシスカン三会の総長たちも出席し、その存在感を示しました。出席したのは、コンベンツアル小さき兄弟会の兄弟Carlos Alberto Trovarelli OFMConv、カプチン小さき兄弟会の兄弟Roberto Genuin OFMCap、そして小さき兄弟会の兄弟Massimo Fusarelli OFMです。

初日、参加者たちは、聖フランシスコが御父の家へと帰ったことを記念する、厳かな帰天祭を捧げました。

記念祭の2日目には、集会と共同の祈りが行われました。クラクフ大司教であるGrzegorz Rys枢機卿による講話が行われたほか、参加者たちには総長たちと直接対話する機会も設けられました。ディスカッション・パネルの中で、総長の兄弟Mas-

simo Fusarelli OFMは、アシジの聖フランシスコを「神の未来から来た人」と呼びました。チェラノのトマスに言及しながら、彼は聖フランシスコを歴史の中に閉じ込められた人物としてではなく、未来の人——すなわち、神とその「明日」から、私たちの元へと直接やってくる人物として提示したのです。フランシスコは過去に属しているのではなく、絶えず生まれつつある神の新しい現



実の預言者なのです。

さらに彼は、私たちが理想化された過去を憧れやノスタルジーをもって眺めるあまり、しばしば霊的な無気力に陥ってしまうと付け加えました。その一方で、アシジの貧者聖フランシスコは、私たちをこの麻痺状態から引きずり出してくれま

す。彼は、神との本物の出会いが私たちを「現在」と「未来」へと開かせることを示しているのです。その出会いを通じて私たちは新しい感性を獲得し、あらゆる被造物と、深く、敬意に満ちた対話に入ることが可能になります。

彼は、この姿勢の鍵となるのは、私たちの内におられる聖霊の現存に対して、絶えず注意深くあらうとする努力であると強調しました。フランシスコは、外部の困難や制限がどうであれ、絶対にどのような状況においても、この現臨を体験することができ、また体験すべきであることを教えています。自分自身の部屋を持たなかったとき、彼は自分の頭巾や袖で顔を覆うだけで世界の喧騒から自らを切り離し、自分自身を神殿とすることができました。これは、主が私たちをどこに置かれよう

とも、私たちの内なる祈りの空間を見出すようにという、私たちが受けている召命なのです。

2日目の中心となったのは、Grzegorz Ryś枢機卿の主式による聖霊のバジリカのミサでした。



午後には、参加者たちは聖堂のツアー、VRプレゼンテーション、カルバリオの歴史、学術講義、分かち合いグループなどのワークショップに参加しました。聖フランシスコに関する講話が兄弟Tomasz Czajka OFMConvによって、聖書考古学に関する講義が兄弟Marian Arndt OFMによって行われ、心理学とフランシスカニズムというテーマについては兄弟Piotr Stanisławczyk OFMConvが講じました。また、管区会議前の「アンダー10」の兄弟たちと、兄弟Massimo Furesarelliとの集いも行われました。

夜には、ヴロツワフの「FDA Antoni」グループが準備したパフォーマンスを鑑賞し、その後、兄弟的な親睦のひとつときを楽しみました。

この記念祭は、Andrzej Czaja司教の主式による





管区会議、 アシジの聖フランシスコ・セラピム管区 ウンブリアおよびサルデーニャの小さき兄弟たち(イタリア)



WWW.OFM.ORG

イタリアのウンブリアとサルデーニャの兄弟たちが所属する、アシジの聖フランシスコセラピム管区の管区会議が、2026年4月と5月の2つの部分に分けて開催されました。

「旅と弟子としての歩み」を共通のテーマに掲げ、4月に兄弟たちは「マリアの訪問」の福音的アイコンである「彼らは急いで出かけた」という言葉に触発されて出発しました。管区会議の第1フェーズは、執着を乗り越え、過去の確実性を手放して、現在の新しさや変化する世界における福音化の課題へ開かれていくための招きとなりました。

この管区会議の選挙により、次の3年間の管区の指導部が決定されました。

The capitular elections determined the leadership of the province for the next triennium:

- ・兄弟Marco Vianelli : 管区長
- ・兄弟Georges Massinelli : 管区副長
- ・兄弟Simone Ceccobao、兄弟Andrea Dovio、兄弟Dario Garioni、兄弟Antonello Medda、兄弟Luigi Napolitano、兄弟Rosario Vaccar : 管区理事

新しい指導部には、この地域における修道院や

活動の再編と識別のデリケートなプロセスにおいて、管区に伴走する任務が託されました。

選挙を行う第1部を終えた後、兄弟たちは5月17日にサンタ・マリア・デリ・アンジェリ「ドムス・パチス」に再び集まり、管区会議の第2部を開始しました。開会は、明確で示唆的な使命によって特徴付けられました。それは、現代人の現実、歴史、そして脆弱性にしっかりと寄り添うために「足をしっかりと現実につけて」歩むこと、そして、恵みの地平と聖霊の導きを決して見失わないために「視線を天に向けて」歩むことです。このセクションは、霊的直感を具体的選択や計画の路線へと翻訳するための、まさにふさわしい時間として、ただちに形作られていきました。

第2セクションの極めて重要な瞬間は、共同体の外部からの声に耳を傾けることでした。これは、広い規模で体験されたシノドス的プロセスです。イタリアにおける教会の現状と展望に関するGiuseppe Baturi司教の報告を聴講した後、管区会議は、在世フランシスコ会（OFS）の家族や、第三会正則修道会（TOR）の献身生活を生きる姉妹たちの代表者にスペースと発言の機会を設けました。この比較と対話によって、兄弟たちと信徒がそれぞれのカリスマに従い、神の国の構築のために積極的に協力し合う「多様性の中の共同責任」の重要性が浮き彫りになりました。



様々な委員会での作業を通じて深く探求された課題は、こうして共同体の視点から組み立てられ、兄弟的生活と人間関係の質を守りたいという深い望みによって導かれました。そこで浮かび上がった目標は、個別主義を乗り越え、共有された、より広く相互依存的なプロジェクトに開放するために、この地域における存在意義を再考することです。このようにして、共同体は、この管区会議で体験されたものと同じ受け入れの精神をもって、

現代世界の課題や最も脆弱な現実に近づくことができる宣教とアプローチの形となるのです。

自らの脆弱性を自覚しながらも、共に歩む喜びに支えられ、管区会議に参加した兄弟たちはそれぞれの共同体へと出発していきました。聖霊の働きの中で、共同生活の預言と宣教の実りを、もう一度開花させる準備を整えて。

ポーランド、天使たちの聖マリア管区、 中間管区会議

2026年5月18～22日、クラクフ＝ブロノヴィツェ・ヴィエルキエ



WWW.OFM.ORG

2026年5月18～22日にかけて、ポーランドにある天使たちの聖マリア管区の「中間管区会議」がクラクフ＝ブロノヴィツェ・ヴィエルキエで開催されました。この会議には、諮問権を持つ数人のゲストとともに、42人の兄弟たちが参加しました。今回の管区会議は、「聖フランシスコの年に、過去に耳を傾け、現在を識別し、責任をもって管区の未来を形作る」というテーマのもとで行われました。

管区会議は、クラクフ大司教であるGrzegorz Rys枢機卿の主司式による荘厳ミサをもって幕を開けました。枢機卿は兄弟たちに対し、イエス・キリストこそが常にフランシスカンの生活の中心であり、神との生きた関係こそが本物の平和と兄弟愛をもたらすことができるのだということを思い起こさせました。続く数日間、兄弟たちは聖霊のバジリカのみさやその他の共同の祈り、そして作業セッションに参加し、管区および教会が直面している司牧上の課題と将来の展望について省察を深めました。

管区会議の期間中、新しい管区理事の選挙が行われました。彼らは管区長および管区副長とともに、管区の指導部を構成することになります。選ばれたのは下記の兄弟たちです。

- ・兄弟Nikodem Gdyk OFM、
- ・兄弟Alojzy Warot OFM、
- ・兄弟Cyprian Mazurek OFM、
- ・兄弟Serafin Broniowski OFM、
- ・兄弟Lucjusz Wrotniak OFM

この管区会議の中で特に意義深かった瞬間は、アシジの貧者聖フランシスコの帰天800周年の記念祭の一環として体験された、聖フランシスコの帰天の記念式でした。祈りの時間には「Trinus Ensemble」というグループによるコンサートが華を添え、最も古いフランシスカンの聖歌が披露されました。

また、管区会議の最終セッションに、総長である兄弟Massimo

Fusarelliと総理事の兄弟Konrad Cholewaが出席したことは、極めて大きな意味を持つものでした。兄弟Massimoは参加者たちに向けて励ましの言葉を述べ、兄弟たちが忠実に福音を生き、一致を築き、そしてアシジの聖フランシスコの精神をもって現代世界の課題に立ち向かうよう促しました。

あわせて、管区会議の最終文書と管区の兄弟たちへ宛てた書簡が提示され、管区会議に参加した兄弟たちによって承認されました。そして、管区会議は総長の主司式による聖霊のバジリカのみサをもって閉幕しました。





Animation of the Order

2026年、正義と平和・被造物の保全（JPIC）コース 被造物の賛歌からアシジの聖フランシスコの帰天へ



WWW.OFM.ORG



小さき兄弟会の総本部JPIC特別委員会は、ローマ、教皇庁立アントニアヌムと共同で、2026年5月18～24日にかけて、JPIC年次国際コースを開講した。このプログラムは、とくに本会およびフランシスカン家族において新たにJPICのアニメーション奉仕を始めた人たちを対象として企画されたもので、正義、平和、そして共通の家の保全のための福音的責務を強化したいと望む信徒や若者たちにも開放された。

今回のコースは、本会が祝う最後の二つの800周年、すなわち『被造物の賛歌』とアシジの聖フランシスコの帰天を記念する枠組みのなかに位置づけられていた。この展望に基づき、「被造物の賛歌からアシジの聖フランシスコの帰天へ」というテーマで、福音とフランシスカン霊性という光のもと、現代の諸課題に対する新しい解釈が示された。

総長は、案内の手紙のなかで、この二つの800周年が数多くの考察を生み、それらがいま、社会生活や宣教活動の一部となっていることを指摘し、それぞれの具体的現実においてより効果的フランシスカンの活動を推進する養成的で司牧的歩みを強化する機会として、このコースに参加することを呼びかけた。

この一週間のコースのプログラムは、理論的講

義と実践的演習を組み合わせ、社会的、環境的正義や平和といった分野で、分析の基準と実践の手段を提供することを目的としていた。この養成プログラムは、前回の正義と平和・被造物の保全国際評議会（アシジ、2025年）で承認された指針に沿い、次の三つの優先事項を中心に展開された。移民や難民のための正義の追求、暴力に傷つけられた世界における平和の促進、そして被造物の破壊に終止符を打つ責務である。

本コースの構成は、互いに補完し合う四つの段階からなっていた。第一に、人間の移動、武力紛争、社会的、環境的危機と結びついた世界的らびに地域的課題に対する最新の視点である。第二に、キリスト教の総合的責務の基礎として、イエスの過越と聖フランシスコの帰天を哲学的、神学的、フランシスカンの観点から読み解くことである。第三に、世界各地でこれらの領域においてすでに実行されている、兄弟性の具体的で希望に満ちた経験の紹介である。最後に、正義と平和・被造物の保全のアニメーションから出発して、変化と影響力を伴うプロセスを生み出すことを目指した、シノドスの視点による参加型計画の日常的場である。

初日の5月18日月曜日は、プログラムに従っ





て、Giuseppe Buffon, OFMのあいさつと、Miguel Angel Jaimesが提案する計画策定の方法論の導入で幕を開けた。続いて、Ilaria Scentiによる移民と難民に関する講演と、Nicolas Pazおよびパックス・クリスティ・インターナショナルによる現在の戦争と紛争に関する講演が行なわれ、最後に、エコロジー危機をテーマとしたドキュメンタリー『ラ・カルタ』が上映された。

5月19日火曜日には、兄弟Andrea Bizzozero, OFMが哲学における「姉妹である死」について考察し、兄弟Gonzalo Collipal (OFM) は、旧約聖書における死と復活について掘り下げた。兄弟Carlos Molina (OFM) は、聖地における平和の責務の経験を分かち合った。この日は、兄弟Daniel R. Bianco (OFM) による、フランシスカンJPICアニメーターのポートレイトを紹介することで終わった。

5月20日水曜日には、兄弟Elton Viagedor, OFMが、イエスの受難と死、そして復活についての黙想を指導した。続いて、シスターMiriam Oyarzo (聖心の宣教フランシスコ会) が移民や難民の受け入れについてあかしし、Miguel Angel Jaimesは、正義と平和・被造物の保全のアニメーションにおける変革をどのように指導していくかを教えた。

5月21日木曜日には、この歩みは、『被造物の賛歌』と聖フランシスコの帰天とを結びつけた。兄弟Cesare Vaiani, OFMは、原点への回帰を提案した。それから兄弟Giuseppe Buffon, OFMの司会で、「賛美されますように、私の主よ、姉妹である私たちの肉体の死によって」について考察が行なわれた。また、兄弟Antonino Clemenza, OFMがフランシスカンと総合的エコロジーに関する経験を発表し、Miguel Angel Jaimesは、どのように変革を指導していくかについての追加セッションを行なった。

5月22日金曜日には、兄弟Francisco Gomez, OFMが『福音宣教綱領』における福音宣教の任務としてのJPICについて紹介し、兄弟Taucen Girsangは、フランシスカン霊性における正義と平和・被造物の保全のアニメーションについて掘り下げた。午後には、Juan Alfredo Bianco博士が植民地主義・脱植民地主義プロジェクトについて扱い、Miguel Angel Jaimesは、正義と平和・被造物の保全のインパクトモデルを提示した。5月23日土曜日には、Miguel Angel Jaimesが、フランシスカンの各管区・分管区等のアニメーション計画に対する戦略的ワークショップを指導した。この一週間のコースは、評価と閉会式で幕を閉じた。

コースの日程にはアジジ訪問も含まれていて、800周年の文脈においてきわめて重要な場所となっているポルチュウクラや聖フランシスコの墓を訪れることができた。

KOINONIA



OFSおよびYouFraの霊的補佐会議が発行する会報『コイノニア』の最新号が発行されました。

[Download the issue](#)

尊者Maria Ana Alberdi Echezarreta, OIC フランシスカン・コンセプション会員



WWW.OFM.ORG

5月22日、教皇レオ14世は、列聖省長官であるMarcello Semeraro枢機卿を謁見し、神の僕María Ana Alberdi Echezarreta（本名：Maria de la Concepcion Cruz）の徳行に関する教令の公布を承認した。彼女はマドリードの「ラ・ラティーナ（La Latina）」修道院のフランシスカン・コンセプション会修道院長で、1912年5月3日にスペインのサン・セバスティアン司教区アスコイティアで生まれ、1998年11月27日にマドリードで帰天した。

尊者María Ana Alberdi Echezarretaは、マドリードの「ラ・ラティーナ」と呼ばれるフランシスカン・コンセプション会修道院の修道女として、修道誓願を宣立してことを通して自らを聖化した。

幼い頃に両親を亡くして孤児となった彼女は、熱心なキリスト教的環境の中で叔父・叔母たちと共に暮らした。修道共同体でのいくつかの養成経験を経た後、彼女はマドリードのフランシスカン・コンセプション会に入会しました。1936年7月に内戦が勃発したため、修道女たちは修道院を離れてより安全な場所へ避難することを余儀なくされた。共同生活が再開されると、修道女マリア・アナは1947年に修練長に任命され、1953年に初めて修道院長に選出された。姉妹たちから非常に愛され、尊敬されていた彼女は、その後の管区会議でも常に再選され、聖座の特別インドゥルトによって常に承認されながら、34年間にわたり修道院を活性化し、奉仕した。その間、副院長を務めた3年間（1984～87年）だけが唯一の中断期間だった。1963年、マザー・マリア・アナは約350人の修道女で構成されるカスティーリャ・フランシスカン・コンセプション会連盟の会長に選出された。

神の僕は、姉妹たちに対する大きな愛をもって、また第二バチカン公会議が望んだクラウズラの必要な適応に対しては知恵と慎重さをもって、そして修道院の優れた管理のための強い意志と主導権をもって、自らの奉仕のミッションを遂行した。また、彼女に助けを求める人々に対しては、物質的にも霊的にも常に喜んで手を差し伸べた。

彼女にはまた、フランシスカン・コンセプション会の会憲の改定において、自身の豊かな霊的経験を役立て、自らの修道家族に対して、フランシスカン的であると同時にマリア的でもあ

る創立のカリスマの独創性を提示したという大きな功績があった。

マザー・マリア・アナは、世界中のすべてのコンセプション会修道院との霊的交わりの中で、長年待ち望まれていた創立者聖Beatriz de Silva y Menesesの列聖式（1976年10月3日にバチカンにて教皇パウロ6世により挙行）の喜びを味わった。1993年に彼女は60年間のクラウズラ生活を記念した。1998年6月、彼女は最後となる苦しい病を患ったが、十字架への完全な愛をもってこれを受け入れ、11月27日、聖徳の名声に包まれて帰天した。

この列福調査（Cause of Beatification）は2007年、小さき兄弟会の総代理者（Postulator General）である兄弟Luca de Rosa, OFMによって開始された。



News from the Entities



マルセイユにおける移民のための、
フランスカン宣教と移民の宣教者たち
三位一体小教区にある国際共同体



WWW.OFM.ORG



マルセイユの旧港の敷石には、紀元前600年頃、現在のトルコにあたるフォカイア出身のギリシャ人たちの到来を記念する石が設置されている。これらの航海者たちは、当時ケルト系のリグリア人が住んでいた古代のラキュドン古い入り江に上陸した。

したがってマルセイユは、その起源からして、さまざまな人々、言語、文化が会うことによって形成された都市である。

この港は、その後何世紀にもわたって、地中海全域およびその先の地域からやってくる商人、難民、船乗り、移民を受け入れてきた。1980年代から90年代にかけて、移民問題、社会的不平等、政教分離に関する論争によって、マルセイユの多文化的性格は、公の議論においていっそう顕著となった。今日この都市は、緊張や社会的課題、包摂にまつわる問題もないわけではないが、しばしば共生の象徴として紹介される。

このような多元的な状況の中で、イスラーム教、ユダヤ教、キリスト教の各コミュニティ間における諸宗教対話の取り組みも数多く培われてきた。日常的出会い、地域社会における関係、慈善事業が、相互的尊重と社会的平和の構築に寄与し

てきた。

最初の小さき兄弟たちは、1220年代にはすでにマルセイユに到着していたとされる。現在、旧港近くの聖三位一体の小教区には、35歳から76歳までの5人の兄弟たちからなる国際共同体がある。修道院長の兄弟Jean-Damascène Kumaは、7年前にトーゴからフランスにやってきた。主任司祭の兄弟Joseph Pham Dinh Phungは、ヴェトナム出身の若い宣教師である。教区の対話奉仕チームの一員である兄弟Patrick Shamは、モーリシャス出身である。共同体の他の2人のメンバー、兄弟Florent Nibelと兄弟Alain Pagetはフランス人だが、それぞれアルザス地方とブルゴーニュ地方の出身である。

共同体は、イスラーム教徒が住民の多くを占める地区で、人々と生活を分かち合い、深い兄弟的精神で奉仕しながら、簡素に暮らしている。兄弟たちは、食事の準備も交代で行なっている。朝食には必ずバゲットが出され、毎日米が食卓に上る。辛いソースや食後のおいしいフランス産チーズも欠かせない。これは、異なる文化を消し去ることなく受け入れていく共同体の、シンプルでありながら意義深い象徴である。

兄弟たちの奉仕職には、小教区司牧や慈善事業、ロマ・コミュニティへの奉仕、移民を対象としたフランス語講座、諸宗教対話、そしてクララ会や在世フランシスカンの地方兄弟会（コルシカ島も含む）といったフランシスカン家族への同伴などがある。

聖クララ修道院もまた、このような国際的側面をあかししている。1254年に聖クララの妹であるアシジのベアトリーチェによって創立されたこの修道院には、現在15人の姉妹たちが暮らしている。そのうち4人はフランス人、1人はインド人、そして10人はヴェトナム人である。ヴェトナム出

身の姉妹たちは、2006年以降、ヴェトナムのトゥドック修道院との協力により、数回に分けてこの修道院にやってきた。

ヴェトナム人の姉妹たちは、言語の習得や異なる文化に慣れることの困難について語る一方で、他の国出身の姉妹たちと生活を分かち合うことの豊かさについても語る。姉妹たちは、困難や違いはあるけれども、召命の喜び、姉妹愛、神における生活がどこにおいても経験できることをあかししている。ある若いヴェトナム人の志願者は、こう簡潔に語った。「私の人生の最大の幸福はここにあります。これがすべてです」。

LIFE in the Order



莊嚴誓願

4月23日、聖母の七つの喜び分管区(ブラジル)

兄弟Edson Roberto Andrade

兄弟Matiel de Oliveira Bernabé



司祭叙階

3月18日、聖母被昇天管区 (イタリア)
兄弟Giuliano Santoro

† 5月14日：兄弟Alessio (Diego) Martinelli
聖アントニウス管区 (イタリア)

† 5月12日：兄弟Conrado (Konrad) Lindmeier
無原罪の御宿り管区 (ブラジル)

† 4月19日：兄弟Andelko Barun、
聖十字架管区 (ボスニア・ヘルツェゴビナ)

† 3月20日：兄弟Vjekoslav Matić、
聖十字架管区 (ボスニア・ヘルツェゴビナ)



帰天された 兄弟たち

† 5月22日：兄弟Claudio Moser、
聖アントニウス管区 (イタリア)

† 5月19日：兄弟Norbert (Edwin) Ellul
Vincenti、聖パウロ管区 (マルタ)

総事務局
からの情報



JOURNEY TO GOD



スコッツデール（米国）にあるフランシスカン・リニューアル・センターは、自館のウェブサイトにて「聖ボナヴェントウラの《神への旅》黙想会」を公開しています。これは 2024 年 11 月に専門的に撮影されたもので、現在、会員向けにオンラインで利用可能となっています。

この黙想会は、スコッツデール・センターが約 40 年にわたり対面で提供してきたもののデジタル版であり、ウェブサイトを通して遠隔でも参加できるようになりました。

<https://casaconnect.thecasa.org/JIG>.

Holy See



教皇レオ十四世、 回勅『マニフィカ・フマニタス』を発表 人工知能時代における人格の保護



WWW.OFM.ORG



教皇レオ十四世は、2026年5月25日に、最初の回勅『マニフィカ・フマニタス (Magnifica Humanitas)』を発表した。本回勅は、人工知能時代における人格の保護を扱ったものである。この文書は、現在も進行しつつある時代の変化に対する識別を提案し、技術的進歩によって人間が単なる機能やデータ、あるいはパフォーマンスに還元されることのないよう、教会共同体および市民社会に対し、人間の尊厳を中心に据えることを呼びかけている。

回勅は、現代の「新しいことがら (res novae)」を目の前にして、人類が「新たなバベルの塔を積み上げる」か、「聖なる都市を築く」か、すなわち自律と権力の論理と、共同責任と交わりの歩みとの間で岐路に立たされていると述べて始まる。このような展望のもと、教会の社会教説は、政治的あるいは制度的専門性を代替するのではな

く、福音の光に照らして歴史を読み解き、思考の原則、識別の判断基準、行動の指針を示すことのできる、生きた思想として提示されている。

この文書の中心にあるのは、三位一体の神の似姿としてつくられ、交わりへと招かれた、人格の関係性という視点である。あらゆる機能的評価よりも優先され、いのちの権利をはじめとするあらゆる人権の基礎となっている人格の尊厳は、これに由来する。回勅はこうして、共通善、知的財産（デジタル知的財産も含む）の普遍的割り当て、補完性、連帯の原則を呼びかけ、それらを人類の総合的發展という地平へと向かわせる。

テクノロジー、力、人格の間の関係に、とくに注意が払われている。人工知能は、一般に实际的利益をもたらすツールとして認識されている。しかし、回勅は、とりわけAIが生命、名声、機会へのアクセスに影響を及ぼすような意志決定プロセスに関与する場合に、技術主義的パラダイムや新しい形態の支配、不平等、統制が生じるリスクについて警告を発している。さらに、人間の知性と人工知能の違いについてあらためて確認する。人工知能は、身体、喜びと苦痛、労働、愛、責任といった経験の内面を理解することはできないのである。

続いて回勅は、デジタル・トランスフォーメーションにおいて、「人間性を保護する」ために決定的役割を果たす三つの領域、すなわち真理、労働、自由に焦点を当てる。デジタル・エコシステムにおいて、公のコミュニケーションの特性は、社会的信頼性と密接に関連しており、批判的思考の教育と責任が求められる。労働は、参加の通常の方法として、また、尊厳の次元として、人々が機械の速度に適応しなければならないという論理の犠牲にすることはできない。そして自由も公の問題であり、依存症や大量のデータ収集による新たな形態の支配によって脅かされている。

回勅は、「力の文化」と「愛の文明」との対比によって、テクノロジー、権力、暴力の間の結びつきがますます強くなっていることを告発し、いかなるアルゴリズムも戦争を倫理的に容認しては

ならないことを再確認している。その代わりに、被害者の視点を判断の基準とし、外交を平和構築の通常の方法とする、正義、兄弟愛、対話を基礎とした「愛の文明」を提唱した。

回勅の発表は、教皇のあいさつで締めくくられた。教皇は、135年も前に先任者の教皇レオ十三世が、「故郷から引き離された工場労働者とその家族の状況と、急速な産業の変革によって生まれた新たな形の貧困」を目の当たりにして、「人間の尊厳を脅かす時代の転換点に、教会が傍観者でい続けてはならない」と理解したことを指摘した。レオ十三世のこうした観察によって、回勅『レールム・ノヴァールム』は誕生した。今日、戦争においても人工知能が用いられるという特徴をもった現代世界を観察することで、『マニフィカ・フマニタス』は誕生した。レオ十四世は、「人工知能は今や『武装解除』を、すなわち、それを支配と排除と死の道具にしてしまう論理から自由にされることを必要としています」と述べ、単に代替するだけでなく、「きずなを修復し、信頼を回復し、未来への希望を再び呼び覚ま」して、再建することの重要性を強調した。

最後に、教皇はマリアの模範に従うことを呼びかけた。「皆様の一人ひとりを聖母マリアにゆだねます。[...] 愛と奉仕のうちにすべての人の真の偉大さを認めることをマリアが私たちに教えてくださいますように。主が今日私たちがその恵みにゆだねる大いなる計画に実を結ばせ、歴史の中で愛の文明を成長させてくださいますように」。

回勅『マニフィカ・フマニタス』は、総合的人間開発省のホームページで公開されている。同サイトには、回勅全文に加え、さまざまな情報、司牧キット、その他のリソースが掲載されている。

さまざまな言語で回勅を読む：

[Deutsch](#) - [English](#) - [Español](#) - [Français](#) - [Italiano](#) - [Polski](#) - [Português](#) - [دُيُبرَعِلَا](#)

Subscribe

Write us

Web

Follow us



Newsletter



comgen@ofm.org



www.ofm.org



@ofmorg



@fratrumminorum



@ofm.org



flickr

Curia Generale dei Frati Minori
Via di S. Maria Mediatrix, 25
Roma, Italia

Director: Br. Byron A. Chamann Anléu OFM
Translators: Br. John Luke OFM; Br. Arthur Andersen OFM

OFM
Ordo Fratrum Minorum
© 2026 All rights reserved